



ビー、ボォーッ、ガツタンゴォーッ、大きな音と一緒に汽車が揺れて、ビー子もトン子もびつくり、ブーッくそれはく大きな聲を出しましたよ。

「あつ、動いた動いた 動き出したよ」ガツタンゴッく、トン子とビー子のお體もガツタンゴッく、さつき小父さんがちやんこお外を見る事が出来る様にお頭をお窓の方に向けて下さいました。トン子にもビー子の所にも四角いお窓があつたのです。動くく、木もお家も電信柱もふみきりも、「マラソンより未だ早いのね、いつかお母さんと一緒に見た活動寫眞の様ぢやない？」トン子もビー子も先に原つばで衛生活動をしていたのを遠くから見た事がありましたので思ひ出しました。

レールが何本もく敷いてある所を通りました。ずつこ向ふにも汽車がガツタンゴッく走つてゐます。小さいお窓から人のお顔がぎつさり見えました。

「あたし達を見てゐるのか知ら」

トン子もビー子も何だかはづかしい嬉し様な氣がしました。廣いく原つばの所も通りましたし、菜種のお花が一ぱい咲いてゐるお島も見えました。それから川がチヨロく流れてゐる所も通りましたし、大きな廣い川の上も通りました。それを見てもく皆珍しいものばかりで、トン子もビー子もよく見るのに其れはく一生懸命でした。

「うれしいのねブー〜」「面白いのねブー〜」

驛の所も通りましたけれど、トン子達の汽車はガツタンゴツコ〜走つてばかり居ります。

驛には美味しさうなものが澤山並んでゐるのが見えました。お山の間を通つたり、トンネルに入つたり又綺麗な景色が見えたりする度に、トン子も「ブー〜」ビー子も「ブーブー」

云ひました。いくつも〜の驛を通り過ぎて、トン子達の汽車は未だぎん〜走つてゐます。

「此の汽車はきつゝ急行なのよ。だから小さい驛に停まらないのね」

「そうだわ〜ブウ〜」

「あゝお腹が空いて来た、何か食べるものはないかしら」

さう云つてゐる中に、ガツタンギイツミ大きい音がして、トン子ミビー子のお體も、ガツタンブウブウツ

「おやこまつた、ぎうしたのでせう」

「汽車の脱線かも知れない」

よく見るミ、そこは小さい〜驛でした。

停車場よ、小さい停車場ね、誰か乗るのか知ら、ギイツギイツ戸の開く音がしてトン子

の箱もピー子の箱もズル／＼ズル／＼動きました。

見るまゝ、青い服の小父さんが、二人で笑ひ乍らトン子ミビー子の箱を汽車から下してゐます。「何だあたし達が下りるのだわ」

トン子もピー子も遂々下されました。

「變だね／＼ブウ／＼」「變だね／＼ブウ／＼」云つて居りますまゝ、黄色い服のおぢさんが来て、トン子ミビー子の箱をリヤカーに乗せました。

今度は何處へ行くのか知らま思つてゐるまゝ、自轉車が動き出しました。

「おや動／＼停車場もお家も、でも田舎の汽車はのろいのね」

トン子やピー子はリヤカーに乗せられても汽車だま思つたのでした。

向ふの方にはお山が見えますし、葦屋根のお家もあります。廣い／＼原つばの所に來ました。トン子もピー子も下されました。其處には新しい、トン子達が入るのに丁度よいお家があつたのです。トン子もピー子も箱から出されて其のお家に入られました。黄色い服の小父さんが笑ひ乍ら、お豆腐の粕ミ人參ミ交ぜた御馳走を持つて來て下さいました。トン子にもピー子にも大好きな／＼御馳走だつたのです。

小屋のかこひの所に、優しさうな坊ちゃんミお嬢さんが五六人こつちを見て笑つてゐました。

トン子とビー子は、何だか恥かしくなつて、細い尻尾をビクビク振りました。それから毎日、トン子とビー子は新しいお家で、綺麗な原つばやお山を眺め乍らたのしく過しました。

## 選外佳作の十一

# 蛙と螢

岡本千枝子

綺麗な小川に、小さな水車が廻つて居りました。その水車の側に、ちつぽけな、草のお家がございました。その草のお家には、蛙さん、螢さん、仲よく住んで居ました。

いつも二人は、お夕食の御用意をする爲に、手提を持つて、市場に出掛けます。市場はズット川上の原つばにございました。

今日も二人は、お買物に行くために、螢さんは蛙さんに、一生懸命青いリボンを結んでやりました。蛙さんは螢さんに青いお帽子を被せてやりました。そして、おそろひの、真白いエプロンをかけて、手提を持つて、出掛けました。